論文要約

「美と教育」という謎――プリズムとしてのシラー『美育書簡』――

西村　拓生

（問題設定）

本論文は、シラーの『人間の美的教育に関する一連の書簡』（『美育書簡』）の解釈史の検討を通じて、美、芸術、美的なものの教育的、人間形成的な意義について原理的、包括的に考察したものである。

『美育書簡』は上記のような主題が論じられる際に必ず引用される古典中の古典であるが、著者のシラーの最終的な主張を一義的に理解することが困難な、その意味で難解なテクストとしても知られている。その所以は、著作の前半では美的なものがカント的な理性的・道徳的状態、理性的国家への手段・過程として位置づけられているのに対して、著作の終盤に至って、美的・感性的状態、「美しい仮象の国」がそれ自体、志向されているようにシラーの論調が「屈折」しているからである。

この「屈折」をどのように解釈するのかは、200 年以上、シラー研究における難問であり続けたのみならず、多くの重要な思想家たちがしばしば、このテクストの解釈に託して美的なものに関する自らの思想的核心を語っている。それらの解釈には、およそ 180 度異なったものが含まれる。

本研究では、それらの中でどれがシラーの「真意」を明らかにするものであるのか、という問いの立て方はしない。むしろ『美育書簡』解釈の多様性の広がりを丹念に跡づけることを通じて、美や芸術、美的なものと教育、人間形成との関係の一筋縄ではいかない重層性、複雑性を、その豊かさを保ったままに明晰さへともたらすことが狙いである。いわば『美育書簡』をプリズムとして、「美と教育」という謎（＝光）の組成（＝スペクトル）を明らかにする試みである。

（序章）

『美育書簡』という古典的テクスト。それを解釈する思想家たち。それらの解釈を検討する筆者。本研究で生じているのは、いわばその三者の「地平の融合」（ガダマー）である。そこで本論に入る前に、序章では、筆者自身のシラー研究の地平を明らかにすることを試みた。それは 1990 年代から 2000 年代にかけての日本の教育哲学における「美と教育」をめぐる議論である。総括的に言うならば、それらの基調は、ポストモダニズムを背景とする、美的なものに対するポジティブな期待と批判的なまなざしであった。そこから『美育書簡』は、美と教育の「近代」を代表する特殊近代的な――それ故の制約も帯びた――思想としても、またその「近代」を超える展望を指し示す思想としても、読まれることになる。

（第１章）

さらに第１章では、問題のテクストの基礎的・前提的な理解のために、シラーの生涯と著作歴における『美育書簡』の位置を確認した上で、第１書簡から第２７書簡までの各書簡の議論を要約しつつ、著作全体の構造の暫定的な見取り図を示した。

（第２章）

以上を踏まえて、第２章からは、シラー解釈史において重要な思想家たちの「美と教育」をめぐる議論を順次検討した。

第２章では、カッシーラーの芸術教育論と、その基調をなしている彼のシラー論を検討した。カッシーラーは、芸術の教育的意義が哲学史上の難問＝「ゴルディアスの結び目」であり続けたのは、従来の議論が、シラーの言うような「美的形式」「生きた形式」の固有性を見逃していたからである、と論じる。シラーにとっては美も道徳も、人間精神の自発性の、自律の、等しく根源的で等しく独自の表現であった、と。

このような議論の根底にあるカッシーラーの「象徴形式の哲学」の影響を受けた現代米国の「美的認識」論は、芸術の教育的意義を、人間は芸術によって固有に、独自に世界を構成する、という芸術的「認識」の固有性に見いだしている。しかし、その意味での芸術の「自由」は、近代における三つの価値領域の分化を前提として、道徳とも、生活世界の全体性とも切り離されたところに成立する自由であり、シラー＝カッシーラーの言う精神の根源的な自発性とは異なる。だとすれば、この方向でのカッシーラーの思想の受容・展開は、かつてのプラトンとは異なった意味で、再びゴルディアスの結び目を切り捨てるに過ぎないことになる。シラー＝カッシーラーの議論は、決してそのように割り切ることはできず、依然として「カントとシャフツベリーの間」に敢えてとどまるものである、というのが筆者の見立てであった。

（第３章）

そこであらためて問題となるのが、「美的形式」を「生きた形式」たらしめている所以とされる「美的仮象」と「現実」や「真理」との関係である。シラーにとって、仮象の世界は人間の（カントとは異なる意味での）自由の所以であったが、他方でシラーは、カントの仮象論に忠実に、美的仮象と現実や真理との峻別を説いている。この仮象の存在論的地位をどのように理解したらよいのか。第３章ではこの問いを検討した。

シラーの仮象論に対する一つの典型的な解釈はガダマーのそれである。ガダマーは『美育書簡』をカント以降の美学の「主観主義化」への転換点と見なし、人文主義的伝統において認識と実践の全般に関わる能力であった美的感覚は、シラーによって仮象と現実という二項対立図式の一方に位置づけられることになった、と批判する。このガダマーのように、美的経験を「本来的な存在」との関係で捉えるのではなく、それ自体本来的なものと捉える立

場は、既にニーチェのパースペクティヴィズムによって先取りされている。

ニーチェ自身は仮象論の文脈でシラーに言及しているわけではないが、仮象は人間にとって生の苦悩からの「救済」である、とするニーチェの思想は、「美的形式」「生きた形式」に人間精神の自由と解放を見るシラーの立場から決して遠くはない。じっさい人間が美的仮象の世界をもつことのニーチェ的なラディカルな帰結をシラーが予感していたのではないか、と思わせるのが、彼の崇高論である。そこでシラーは、美的教育は「崇高」によって補完されねばならない、と述べている。これは決してカントの踏襲ではなく、むしろリオタールが論じるように、崇高は、「同一性の専制」をもたらす美的秩序を破砕し、共同体の秩序に差異や多元性をもたらす、いわば絶対的な他者性のメタファーだからである。

（第４章）

仮象の自由の果てに、それを限界づける「他者」や「外部」が問われる、という議論の構図は、翻って、人間にとって「現実」や「世界」の美的・感性的な「構成」を制約するものは何か、という問題をあらためて提起する。そのような条件があるとしたら、それは私たちが社会や共同体の中で他の人々と共に生きており、さらにその外部に他者が存在している、という事実であろう。この事実を踏まえて、私たちは「美的なもの」の社会的・政治的な意義や可能性を如何に捉えることができるのかを問うために、第４章ではマルクス主義の系譜につながる一連の思想家たちのシラー論を検討した。

ルカーチは、シラーに疎外論の先取りを認めつつ、「美しい仮象の国」をその観念論的な転倒と見る。イーグルトンは、「美しい仮象の国」の不可能性のみならず、むしろそのイデオロギー的な機能を剔出する。しかし同時に、『美育書簡』に、個々人の具体的・感性的な生に立脚する美学－倫理学の可能性をも見ている。その「美しい仮象の国」の現実的可能性を最も強調したのはマルクーゼである。彼は『美育書簡』に託して、美を「新しい現実原則」とする文明論的な大転換を語った。それに比べると、「美的なもの」に対するハーバーマスの期待の語り方ははるかに控えめではある。しかし彼も仮象としての美に、コミュニケーションによる合意形成が可能である、いわば原理的な担保を見ている。彼らの『美育書簡』解釈は、美的なものの社会的・政治的な可能性をめぐって、懐疑や批判から期待に至る幅広いスペクトルを見せていた。

（第５章）

「美しい仮象の国」が、仮に、観念論的な転倒でもなければ、「現実」とは切り離され、峻別される、という意味での「仮象」的ユートピアでもないとしたら、その「現実」的可能性は如何に理解され、展望され得るのか。本研究の後半では、その可能性をめぐって注目すべき三人の思想家の『美育書簡』論を取り上げ、詳細に検討した。

第６章では、ハーバーマスをあらためて検討した。彼が『美育書簡』に読み取る基本的モティーフは、近代の自己分裂と、芸術によるその再統合である。彼は第６書簡に近代社会に

おける疎外と官僚制への批判を読み込みつつ、他方でそれを人類にとって不可避の過程であると見るシラーに共感を示す。「近代というプロジェクト」を擁護し、その再統合を志向する自らの立場がシラーの近代論に重ね合わされているのである。他方でハーバーマスは、美的ポストモダニズムの「生の美学化」に対しては、理性の解放的潜勢力を掘り崩す「誤った止揚」として厳しく批判し、仮象の自律性を強く主張する。では、それとは異なる美的なものの可能性とは何か。

ハーバーマスは『美育書簡』に、彼自身の社会構想、倫理学、政治理論における中心概念である「コミュニケーション的理性」の概念を読み込んでいる。彼によれば、あるコミュニケーションが「真の」討議であり得る根拠は、「理想的発話状況」というコミュニケーションの理念が「反事実的」に、しかし不可避的に想定されているからである。それは、いわば〈理念ならざる理念〉である。他方、シラーにおいて「美」は、直接的に行為の規範を指し示すことがない、あくまで「仮象」だからこそ、人々を「結びつける」とされる。「仮象としての美」は、その意味でまさに〈理念ならざる理念〉である。このようなコミュニケーションの理念と「仮象としての美」の同型性がハーバーマスの『美育書簡』論の核心であり、それによって可能になる生活世界の再統合こそが「美しい仮象の国」の実現である、というわけである。

（第６章）

「自由への教育」を志向するヴァルドルフ教育の創始者シュタイナーにとってシラーは、その「自由」の真の意味と可能性を指し示しているという意味で、ゲーテと並んで重要な思想的源泉であった。彼は『美育書簡』でシラーが描いた人間のあり方に、自らがその教育と社会構想において求める「自由な社会における自由な人間」の先取りを見ていた。第６章では、そのシラー論の含意を理解するために、『自由の哲学』においてシュタイナーが、人間の精神活動と道徳的行為とを、如何に一元的なつながりとして捉えているのかを検討した。シラーが二つの衝動として表現した感覚の世界と感覚を超えた世界とをつなぐのは、表象を媒介とした思考の働きである。その思考の働きは、あくまで人間が自ら生み出すものであるが故に自由である。そしてこの思考の自由が行為の自由をも担保する。人間は、外的世界の知覚に由来する本能的衝動や感情や所与の表象を動機とするのではなく、自らの内なる「純粋な思考」を動機として行為することができる。そのような「自由な行為」は、思考の普遍性の故に決して恣意的なものではあり得ないと同時に、外部から与えられる規範や原則には従わないが故に、常に個別的で具体的なものである。それが、シラーが遊戯衝動の概念に託した、人間の「自由」の原理的な可能性であった、と。

さらにシュタイナーは、そのような「自由」の実現のためには、シラーにおいてもそうであったように、人間の「共同の生」のあり方が問われねばならないと考え、「社会有機体三分節化」論を提起した。私たちはそこに、シラーの「美しい仮象の国」の、一つの具体的で包括的な実現可能性を見ることができるのである。

（第７章）

最後に第７章では木村素衛のシラー論を検討した。シラーの「美しい仮象の国」に来るべき人間や社会のあり方を展望するハーバーマスやシュタイナーに対して、木村のシラー解釈は、私たちの日常的な生の「今、ここ」に「美しい仮象の国」を見るものである。

木村はシラーに即して、「媒介的過程的段階」を超えた美の「一層深い」意義を追求し、美において人間性を全一的に生きることが、すなわち「絶対無」としての「場所」にあって、感性的なものも理性的なものも、人間の全ての「働き」を「包越」し「絶対的に肯定」することを意味している、と論じる。カントが論じていた美の非概念性と無関心性を西田の意味での「純粋感情」の純粋性――「内」ないし「底」への「否定＝超越」によって成り立つ純粋――を意味するものと理解し、そこから、シラーの説く「遊戯」や「美しい魂」は、「絶対無」としての「場所」にあることを意味する、と解釈するのである。

そして、〈私〉の意識や意志も全てはこの無の場所に生じる働きであると捉える西田＝木村の思想を、分別知以前の私たちのあり方の自明性を解き明かしているものと理解するならば、シラーが説いていたことは遥かな理念ではなく、木村の言うような「表現」の弁証法を私たちが生きることにおいて、常に既に実現されている、ということになる。それはシラー論としては、『美育書簡』解釈のアポリアに京都学派に固有の立場から一つの解決を示すものである。美が「絶対無」を意味するのであれば、それは全てを包越し絶対的に肯定するが故に、美的状態は過程か目的かという問いは、既に超えられてしまっていることになるのである。

（結論）

終章では、本研究において『美育書簡』解釈の広がりを通じて析出された「美と教育」のスペクトルを通覧した上で、このような思想史研究が教育（学）にとって如何なる意味をもつのかについて、筆者の見解を明らかにした。すなわち、〈教育現実〉なるものが、教育を「語る」言葉に先立って存在しているわけではなく、両者が相即不可分であるとしたら、それを「語り直す」言語的実践によって〈教育現実〉を変えることができる。本研究でシラー解釈を通じて論じられた美的なものの可能性は、以下のような意味で、その「語り直し」の拠り所となり得る、と。

そもそもシラーにおける「美」は、直接的に人間の生を導いたり、教育の指針となるようなものではなかった。それはあくまで「仮象」である。しかしそれは、教育をめぐる価値が多様化し、相対化され、ほとんど見失われ、あるいは逆に狭隘な一元的価値に絡め取られた機能に教育が解消されがちな状況の中で、それでも教育が、一人ひとりの「よりよい」生を志向し、私たちが共に自由に生きる社会を追求する営みであること、あり得ることの証である。教育という営みの、いわば根拠ならざる根拠、理念ならざる理念である。またシラーにおける「美」は、「崇高」と不可分の深い否定性を内包した、逆説的な肯定性であった。故

に、教育が他者の抑圧や疎外に頽落することを常に戒めつつ、「今、ここ」においてその理念が成就し得ることを、私たちに約束している。『美育書簡』の最後の一節を敷衍して理解するならば、「美しい仮象の国」は私たちの日々の教育関係においても、既に繰り返し実現しているのである。

生の苦しみと不条理、悪への自由にもかかわらず、私たちは世界を「美」として体験し得る。そのような美的経験が、私たちが自らと他者を「よりよい」生へと促す教育という営みの根底をなしている。――『美育書簡』は、このような教育の根底をめぐる思索として読むことができる、というのが、本論文におけるシラー解釈史研究を経た筆者の結論である。

以上